

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
令和元年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	44	番号	大分県
-------	----	----	-----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
豊後大野市	豊後大野市立三重中学校	420名

〇 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

【目 標】	1 中学生の「学びに向かう力」と思考力, 判断力, 表現力等の向上 2 教員の指導力の向上
【重点方針】	1 「中学校学力向上対策3つの提言」の取組の促進による学力向上 2 組織的な学力向上を実現するための新学習指導要領に対応する教育課程編成の支援

(1) 中学校学力向上対策3つの提言の推進

- ① 中学校学力向上対策3つの提言推進重点校の指定
学力定着に課題のある中学校8校（協力校を含む）に対し、「中学校学力向上対策3つの提言」の実行を支援し、学力向上及び望ましい学習集団、環境整備に取り組み、生徒と共に創る授業の推進を図った。

【県教育委員会の推進重点校に対する支援内容】

- ① 人的支援・・・学力向上支援教員（2名×8校）
習熟度別指導推進教員の配置（1名×8校）
- ② 県教育委員会指導主事の継続的な指導支援（各教科等×2回以上×8校）
県教育委員会指導主事の指導の下、全ての教科等で複数回授業研究を実施し、具体的な授業改善の方向性について協議。
- ③ 「3つの提言推進重点校」連絡協議会の実施
令和2年1月24日・・・今年度の取組及び次年度以降の方向性に関する協議
- ④ 「学びに向かう学校」づくり生徒推進フォーラム（令和元年8月2日）
推進重点校の生徒代表者が一堂に会し、学びに向かう学校づくりの取組状況を交流
- ⑤ 先進地視察研修の実施
令和元年10月25日・・・岐阜市立長良中学校 岐阜市立長良西小学校

中学校学力向上対策 3つの提言	
大分県教育委員会(H28年2月)	
1 学校の組織的な授業改善による「新大分スタンダード」の徹底	①生徒指導の三機能を意識した問題解決的な展開の授業を充実させるとともに、習熟度別指導を積極的に導入する。
2 学校規模に応じた教科指導力向上の仕組みの構築	②教科の壁を越え、全ての教科に共通した授業改善の取組内容を設定し、その視点に基づく互見授業・授業研究を実施する。
3 「生徒と共に創る授業」の推進	①複数の教科担任がいる学校は、教科担任の「タテ持ち」や日課表・週時程表に位置つけた教科部会の実施により、相談や切磋琢磨できる環境を作る。
	②生徒による授業評価を実施し、それを授業改善に反映する。
	③学校が目指す授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、適宜振り返り活動を行う。

② 授業力向上をミッションとする人的支援

市町村が作成する学校組織を挙げた学力向上の行動計画である市町村学力向上アクションプランを踏まえ、「新大分スタンダード」の推進をミッションとする人的配置を行った。

① 「学力向上支援教員」72名を各市町村教育委員会に加配

指導方法の工夫改善による児童生徒の学力向上を目指して、効果的な取組を追究し、校内・域内の授業改善の推進を行った（1人年間3回以上授業の公開を実施）。

② 「習熟度別指導推進教員」45名を各市町村教育委員会加配

個に応じたきめ細かい指導と効果的な習熟度別指導の推進を行った（1人年間3回以上授業の公開を実施）。

③ 学力向上支援教員等協議会の実施

学力調査を踏まえた授業改善についての説明や、教科別等に取組状況や課題の情報交換等を通して、児童生徒の学力向上に向けた取組の改善充実が図れた。

第1回 令和元年5月10日…それぞれのミッションの確認

第2回 令和元年8月23日…各種学力調査の結果等の周知

第3回 各自で各種研究会等をそれに充てる

第4回 令和2年1月21日…今年度のまとめ

③ 数学指導力強化巡回指導

数学担当指導主事による中学校全校訪問による、数学教員への直接指導。

④ 中学校の教科部会を活用した授業改善支援（「深い学びを実現する教科別等協議会」）の実施

① 文部科学省教科調査官等を招聘し、学習指導要領の改訂を踏まえた講義を実施

県内全ての中学校から1名以上が参加。学習指導要領改訂後、求められている授業像について一定の理解が深められた。

国語部会 令和元年10月7日

社会部会 令和元年 7月4日

数学部会 令和元年 7月2日

理科部会 令和元年 9月6日

英語部会 令和元年 6月2日

総合的な学習の時間部会 令和元年5月31日

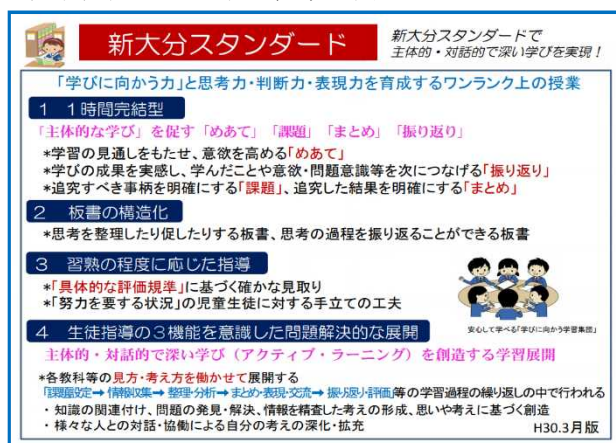
② 県内各地区教科部会と連携した協議会（国・社・理・英）の実施。（6月～1月）

県内14地区の中学校教科部会で研究授業等を実施。その中で義務教育課指導主事が授業の指導・助言や講義を行う。公開授業の助言や講義により各地区の課題の応じた指導を行った。

（2）県内中学校への物的支援

① 大分県学力定着状況調査の実施（平成31年4月23日）

県内の全中学校2年生の学力や学習・生活状況を把握・分析（約10,000人）を通し、学校における生徒への教育指導の充実や学習状況の改善を図った。



新大分スタンダードで
主体的・対話的で深い学びを実現！

「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力を育成するワンランク上の授業

- 1 1時間完結型**
「主体的な学び」を促す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」
*学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
*学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
*追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」
- 2 板書の構造化**
*思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書
- 3 習熟の程度に応じた指導**
*「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
*「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫
- 4 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開**
主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を創造する学習展開
*各教科等の見方・考え方を働かせて展開する
*「課題設定→情報収集→整理分析→まとめ表現交流→振り返り評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる
*知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
*様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

H30.3月版

- ② 数学及び英語問題データベースの配信（年間）
国語、社会、数学、理科、英語問題をWeb上から県内の中学校に配信し、生徒のつまずきの解消を図った。
- ③ 「言語活動ハンドブック（中学生版）」の配付
課題解決的な展開に欠かせない言語能力の育成・活用を図るハンドブックを配付し、更なる言語能力の伸長、言語活動の充実、思考力、判断力、表現力等の育成を図った。

（3）学力向上検証会議の実施

大学関係者、各市町村教育委員会学校教育主管課長からなる学力向上検証会議を年2回実施し、県の学力向上施策について検証

- ① 第1回会議 令和元年9月 9日
学力定着状況調査結果を受け、9月以降の取組を全市町村で確認
- ② 第2回会議 令和2年1月31日
今年度の取組をまとめ、年度末から来年度上半期の取組を全市町村で確認

（4）学習指導要領の改訂に伴う新教育課程への対応

- ① 新教育課程周知のための担当者等大分県研究協議会（令和元年6月10日）
「各教育事務所における地区別説明会」の説明者に対する協議会
- ② 新教育課程周知のための「各教育事務所における地区別説明会」
中学校音楽、美術、保健体育、技術家庭を除く各教科等について①に参加した代表教員が説明を行う。（教育事務所管内ごとに開催 5月～2月）
- ③ 社会に開かれた教育課程の実現に向けた協議会（令和元年7月16日）
カリキュラム・マネジメントに係る講義・実践発表等を行う。
- ④ 新教育課程4部会説明会（令和元年8月9日、11月8日）
小学校音楽、図工、体育、家庭、中学校保健体育、技術、美術についての説明を行う。

2. 推進地区における取組

推進地区では、中学校の学力の定着に課題があることから、県教育委員会が推進する「中学校学力向上対策3つの提言」を市内中学校に広く周知し、「学びに向かう力」と「思考力、判断力、表現力等」の育成を図るよう各学校に指導している。主な取組は以下の通りである。

（1）授業改善に関する取組

- ① 市全体、学校全体で取り組む授業改善
「新大分スタンダード」を意識した校内研究による授業改善と、管理職の授業観察と効果的なフィードバックで組織的に授業改善を図るよう指導した。
学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員を活用した研修会等を推進した。また、「学力向上支援教員」と「習熟度別指導推進教員」は、実践事例を作成し、情報提供が行われた。
- ② 習熟の程度に応じた指導の充実
三重中学校においては数学の習熟度別指導が行われた。
補充学習指導（朝学習、放課後学習）が実施された。
- ③ 市町村の教科部会を活用した授業改善（特に中学校）
中学校の教科部会（国語、数学、理科、英語）は、県教育委員会担当指導主事を招聘しての研修、また、「学力向上支援教員」及び「習熟度別指導推進教員」を活用した研修会を開催した。

④ 小学校外国語教育の充実

豊後大野市内のすべての小学校で、外国語教育の充実を図る。また、新学習指導要領への移行期間である平成30・令和元年度の2年間で「先行実施」として位置付け、令和2年度の本格実施に向けた研究期間としている。

(2) 「学びに向かう学校」づくりに関する取組

共に学び合う集団づくりを重視した学級経営が行われた。

生徒自身が課題を捉え、主体的に取り組む生徒会活動を推進するよう指導した。

「中学校学力向上対策3つの提言」推進重点校の公开发表への参加を、市内中学校だけでなく小学校にも呼びかけ情報提供した。

【公開研究発表会及び講演会】

期日：令和元年10月10日（木）

場所：豊後大野市立三重中学校

内容：公開授業（国語、社会、数学、英語）

講演会（岐阜大学教職大学院特任教授 原 尚 氏）

(3) 保護者・地域と連携した学力向上の取組に関する取組

社会教育課と学校教育課が連携し、放課後 TRY において子どもの学びと家庭教育を支援した。

※放課後 TRY・・・地域のボランティアの協力によって、毎週一回程度行われる放課後の補充学習

(4) その他

学力向上に向けて学校と家庭・地域との協働による取組を決定し、学校経営の最重点及び豊後大野市学力向上プランに位置付けて推進するよう助言した。

新学習指導要領の効果的な実施に向けたカリキュラム・マネジメントの充実が図られるよう指導した。

3. 協力校における取組

協力校では、平成28年度から「学びに向かう集団づくり」を目指し、生徒会の専門部活動と教職員で「Sプロ（学習）」「Lプロ（生活）」「Eプロ（環境）」を組織し、それぞれのプロジェクトにおいて、めあてや見通しを持ちながら活動し、その評価を次の活動に生かす取組を進めてきた。また、昨年度から学力向上対策として、「課題」、「めあて」と「まとめ」、「振り返り」の確実な位置付け、考えを練り合う・学び合う場の設定、生徒による授業評価、教科担任の「タテ持ち」や教科部会の定期開催による教科指導力の向上等に取り組み、授業改善を進めている。主な取組は以下の通りである。

(1) 組織的な授業改善

① 指導主事招聘

総合的な学習の時間を含む各教科等の授業に対して、それぞれ2回以上県教育委員会指導主事等を招聘し、授業研究を行った。

② 互見授業、授業観察、校内研修

教科指導力の向上と授業改善を進めるため、ワークショップ形式での事後研究を行った。

(2) 各教科等の指導力向上の仕組みの構築

- 教科のタテ持ち、日課表に位置付けた教科部会の実施

(3) 生徒と共に創る授業の推進

○ 生徒による授業評価を活用した授業改善

アンケート形式の生徒による授業評価を基に授業改善を実施。1学期の評価では、ペアやグループ学習による対話的学習の取り組みが少ない教科があったので、教科部会やプロジェクト会議を開き、2学期から毎時間ペア・グループ活動を取り入れることを全教員で共通理解を図った。

(4) 学びに向かう学習集団の育成

○ 学級や学年の学習集団としての目標設定と検証

学級学習目標を設定し、授業を振り返ることで、生徒が主体的に授業を創る意欲をもたせた。

(5) 他校との取組の交流

○ 「学びに向かう学校」づくり生徒推進フォーラムの参加

生徒会の代表が8月2日、別府ビーコンプラザにて、自校の取組を発表するとともに、県下9校の中学生と意見交換を行なった。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 組織的な授業改善と「学びに向かう」生徒の意識向上

<学習アンケート(全校)> 5段階でプラス評価(4, 5)の回答率 ※一部抜粋

	項目	7月	12月	差
1	授業は楽しい	53.9%	63.5%	+9.6
2	友達と一緒に解くと楽しい	70.1%	78.0%	+7.9
3	「めあて・課題」を理解して授業に臨んでいる	64.2%	75.9%	+11.7
4	ノートに「まとめ・振り返り」を書く	77.9%	87.8%	+9.9
5	授業の流れがわかる	70.3%	78.8%	+8.5
6	ペア・グループで考えを出し合う時間がよくある	66.4%	80.1%	+13.7
7	ペア・グループ学習で考えが深まる・広がる	59.8%	79.3%	+19.5

アンケート結果において、特に「ペア・グループで考えを出し合う時間がよくある」、「ペア・グループ学習で考えが深まる・広がる」の項目において、1学期末に比し、2学期末で肯定的な回答が増えている。

協力校では教科部会を「Sプロジェクト会議」として位置付け、校内研修の中で時間を確保したり、教科毎に時間設定を行ったりして、教科部会の回数が増えている。その中で、定期的に授業の工夫・課題・改善点について話し合いを行うことで、その都度課題を分析し、改善策を考えることで次の実践につなげることができている。

2. 実践研究全体の成果

(1) 推進地域における取組の成果の把握

① 平成31年度大分県学力定着状況調査結果(中学校概要)

	中学2年生 ※数値は偏差値									
	国語		社会		数学		理科		英語	
	知識	活用	知識	活用	知識	活用	知識	活用	知識	活用
R01	52.0	50.8	50.8	50.5	51.1	51.1	51.2	50.7	50.7	50.8
H30	52.2	50.6	51.1	50.0	51.6	50.5	50.9	50.3	51.1	51.0
H29	50.9	49.8	50.5	49.5	50.3	50.3	50.8	50.2	50.0	49.8
H28	51.3	49.8			50.3	50.4	51.4	50.6	49.9	50.2

- 国語 文章の構成や展開、表現の特徴等を捉えることに課題
- 社会 複数資料の情報を比較して考察したり、情報を結び付けて表現したりすることに課題
- 数学 事柄を調べる方法や事柄が成り立つ理由を数学的な表現を用いて説明することに課題
- 理科 知識を汎用化するため、価値付け、日常場面での活用を実感させることが必要
- 英語 生活に関連した課題の設定や、互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動の設定が必要

② 平成31年度全国学力・学習状況調査結果（中学校概要）

中学3年生 ※数値は正答率			
教科・区分	国語	数学	英語
大分県	74	61	55
全国	73	60	56

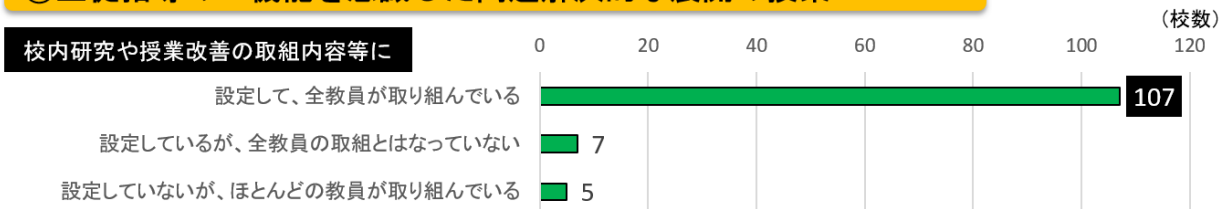
- 国語、数学において全国平均を上回る。
- 平均正答率の合計値は、全国平均を上回る。
- △英語が全国平均を下回る。

英語を正しく聞き取ったり、それを書いて表現したりすることを苦手としている生徒が多い。また、記述式問題の無解答率も全国値より高い。実際に英語を用いて伝え合う活動の充実が求められる。

③ 令和元年度「中学校学力向上対策3つの提言」取組状況調査結果（抜粋）

（提言1）「学校の組織的な授業改善による『新大分スタンダード』の徹底」

① 生徒指導の三機能を意識した問題解決的な展開の授業



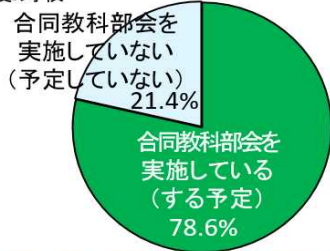
② 「習熟度別指導」の実施状況 ※複数回答可



(提言2) 「学校規模に応じた教科指導力向上の仕組みの構築」

① 近隣校との合同教科部会の実施

※教科担任が1人～2人程度の学校

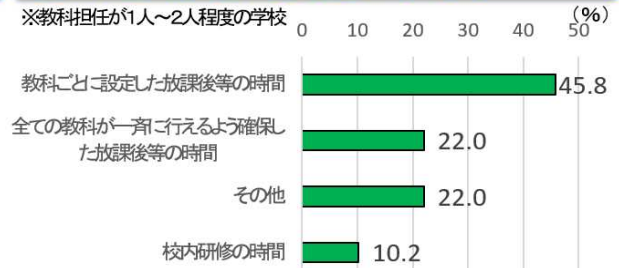


■ 「教科担任が1人～2人の学校」の70校のうち、近隣校との合同教科部会を実施(予定有り)している学校は、55校(78.6%)であり、昨年度より少し増加している。

【参考】H30 : 74%

② 合同教科部会を実施する時間

※教科担任が1人～2人程度の学校



■ 「その他」と回答した学校(抜粋)

- ・授業公開に合わせて参観授業・事後研修会を実施。
- ・教科ごとに日時を設定して、参観授業・教科部会を実施。
- ・公務用共有ネットを利用して情報共有を図る。

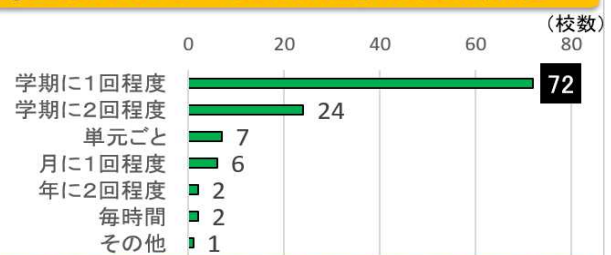
(提言3) 「生徒と共に創る授業の推進」

① 生徒による「授業評価」の実施



■ 「授業評価を実施している」学校は、114校(95.8%)あり、ほぼ100%の学校実施予定である。

② 生徒による「授業評価」の実施頻度



■ 「学期に1回程度」実施している学校が、72校(63.2%)で一番多い。【参考】H30 : 63.6%

(2) 大分県内の学力向上に関する取組状況結果

(調査対象) 大分県内公立小・中学校で実際に授業をする教員5317人

(調査基準日) 令和元年12月27日

「新大分スタンダード」の取組に関すること	小	中	合計
①「めあて」や「課題」を設定した教員数	99.8%	98.6%	99.3%
②「振り返り」を計画的に取り入れた教員数	97.1%	90.8%	94.7%
③板書を構造化した教員数	96.1%	90.0%	93.8%
④学習の「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」を書くように指導した教員数	97.0%	83.9%	92.1%
⑤習熟の程度に応じたきめ細かい指導を工夫した教員数	89.6%	76.2%	84.5%
⑥単元あるいは1単位時間で問題解決的なプロセスの授業を実施した教員数	94.0%	86.3%	91.1%
⑦単元または1単位時間内で生徒指導の三機能を意識した授業づくりをした教員数	95.6%	89.7%	93.4%
⑧ゴールの姿を具体的に評価規準を設定して授業をしている教員数	93.6%	83.9%	89.9%
⑨県教委が示した「単元プラン」例等を活用した教員数	87.2%	78.0%	83.8%
⑩単元プランを作成して、1単位時間の授業を構想している教員数	87.4%	73.3%	82.1%
⑪学習指導案に「努力を要する状況」の児童生徒への手立てを書き入れた教員数	86.3%	73.9%	81.6%
⑫学習指導案に特別支援等の配慮を要する児童生徒への手立てを書き入れた教員数	80.5%	63.0%	73.9%
⑬県教委作成「言語能力育成(中学校は「言語活動」)ハンドブック」を活用した教員数	62.6%	61.7%	62.2%

- ① 取組の成果
 - ・「新大分スタンダード」に関する「主体的な学び」を促す授業構想（「めあて」、「課題」、「まとめ」、「振り返り」の設定が定着してきた。
 - ・生徒指導の三機能を意識した問題解決的な展開の授業の実施は進んでいる。
- ② 課題
 - ・教科等の特質を踏まえ、「めあて」、「課題」、「まとめ」、「振り返り」の質の向上が必要である。
 - ・1時間ごとの児童生徒のつまずきや、特別支援等の配慮を要する児童への指導を想定し、その手立てを十分に計画した授業構想が必要である。
 - ・単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した授業改善が必要である。

3. 取組の成果の普及

(1) 推進地域における取組

以下の協議会や講演会の概要を大分県教育委員会ホームページに掲載した。

① 深い学びを実現する教科等別協議会

<http://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/2019-kyougikai.html>

② 令和元年度「中学校学力向上対策3つの提言」に係る取組状況等調査結果

<http://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/20193teigenntyousakekka.html>

③ 「中学校学力向上対策3つの提言」推進重点校の取組事例

<http://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/3teigennojirei.html>

④ 令和元年度「学びに向かう学校」づくり生徒推進フォーラム

<http://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/2019seitotsuishin.html>

⑤ 自分で言語能力を伸ばす言語活動ハンドブックについて

<http://www.pref.oita.jp/site/kyoiku/gengokatudouhandbook.html>

⑥ 学力向上支援教員及び習熟度別指導推進教員の公開授業の学習指導案

<http://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/gakuryokusyuujukudo.html>

(2) 推進地区における取組

- ① 市内全小・中学校において学力向上プランの策定（4月）
- ② 豊後大野市学力向上推進部会にて、市内における各種調査の分析・改善策の協議（7月）
- ③ 市内全小・中学校において学力向上会議実施（8月、2月）
- ④ 学力向上支援教員2名、習熟度別指導推進教員1名による公開授業実施（年間1人3回）
- ⑤ 豊後大野市学力向上推進部会の実施（月1回）

○ 今後の課題

(1) 「めあて」、「課題」、「まとめ」、「振り返り」の質の向上の必要性

単元等のまとまりを見通した1単位時間の「めあて」、「課題」、「まとめ」、「振り返り」の設定例、単元プラン、板書写真等の実践記録を各地域や学校で整理・保存・活用し、その中から今後の授業改善や「めあて」、「課題」、「まとめ」、「振り返り」の質の向上のヒントにつながるものを共有するなど、これまでの実践の積み重ねに学ぶことも必要である。

(2) 1 単位時間ごとの児童生徒のつまずきや、特別支援等の配慮を要する児童への指導を想定し、
その手立てを十分に計画した授業構想の必要性

各種学力調査結果（全国・県・市町村）や定期考査・単元テスト結果等から、個々の学力状況をきめ細かに点検し、以降の教科の学習に影響を及ぼす内容については確実に習得させる指導の充実が求められる。また、授業単位では、ねらいに対応し、ゴールの姿を具体的に描いた評価規準を設定し、「C努力を要する状況」の児童生徒への習熟に応じたきめ細かい指導が必要である。

(3) 「中学校学力向上対策3つの提言」の更なる推進の必要性

中学校の更なる授業改善のため、以下の点を進めることが効果的である。

- 教科担任の「タテ持ち」の推進
- 日課表に位置付けた教科部会の実施
- 学校が目指す授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、適宜振り返る活動の推進
- 生徒による授業評価の充実
- 「学びに向かう学習集団づくり」の取組の推進

以上の点を更に推進させるため、「3つの提言推進重点校」の取組を県内中学校に広げる必要がある。そのための諸資料の充実を行うことが来年度の課題となる。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	大分県	番号	44
-------	-----	----	----

推進地区名	豊後大野市
-------	-------

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力の育成

2. 研究課題への取組状況

本市では、小学校と比べ中学校の学力の定着に課題があることから、大分県教育委員会が推進する「中学校学力向上対策3つの提言」を市内中学校に広く周知し、「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力の育成を図るよう指導・助言した。とりわけ、推進重点校である三重中学校においては、学校の組織的な授業改善による「新大分スタンダード」の徹底と「生徒と共に創る授業」の創造を目指すよう指導を行ってきた。

(1) 授業改善に関する取組

①市全体、学校全体で取り組む授業改善

- ・授業改善計画、検証可能な数値目標を設定した「授業改善の5点セット」を作成し、「新大分スタンダード」を意識した校内研究による授業改善と、管理職の授業観察と効果的なフィードバックで組織的に授業改善を図るよう指導した。
- ・学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員を活用した研修会等を推進した。また、学力向上支援教員と習熟度別指導推進教員は、実践事例を作成し、情報提供が行われた。

②習熟の程度に応じた指導の充実

- ・三重中学校においては数学の習熟度別指導が行われた。
- ・補充学習指導（朝学習、放課後学習）を実施された。

③市町村の教科部会を活用した授業改善（特に中学校）

- ・中学校の教科部会（国語科、社会科、数学科、理科、英語科）は、県教育委員会担当指導主事・竹田教育事務所指導主事を招聘しての研修、また、学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員を活用した研修会を持った。

④小学校外国語教育の充実

- ・豊後大野市内のすべての小学校で、新学習指導要領における移行期間である平成30・令和元年度の2年間で「先行実施」として位置づけ、外国語教育の充実を図り、令和2年度の本格実施に向けた研究期間としている。

(2) 学びに向かう学校づくりに関する取組

- ・共に学び合う集団づくりを重視した学級経営が行われた。
- ・生徒自身が課題を捉え、主体的に取り組む生徒会活動を推進するよう指導した。
- ・「中学校学力向上対策3つの提言」推進重点校の公開研究発表会への参加を、市内中学校だけでなく大分県内全域にも呼びかけ情報提供した。

【「『3つの提言』推進重点校事業」公開研究発表会】

期日：令和元年 10月10日（木）

場所：豊後大野市立三重中学校

内容：・公開授業（5教科公開）

・全体会 研究発表

・講演 指導講評

岐阜大学教職大学院 特任教授 原 尚氏)

(3) 保護者・地域と連携した学力向上の取組に関する取組

- ・社会教育課と学校教育課が連携して、放課後TRYにおいて子どもの学びと家庭教育を支援した。

(4) その他

- ・学力向上に向けて学校と家庭・地域との協働による取組を決定し、学校経営の最重点及び豊後大野市学力向上プランに位置付けて推進するよう助言した。
- ・新学習指導要領の効果的な実施に向けたカリキュラム・マネジメントの充実が図られるよう指導した。

○研究実施報告〔令和元年度〕

4月	○市内全小・中学校において学力向上プランの策定 ○市内全小・中学校において授業改善計画、検証可能な数値目標を設定した「授業改善の5点セット」を策定
5月	○豊後大野市学校教育振興協議会
6月	○校内研究充実のための指導主事の指導訪問
7月	○市内全小・中学校において学力向上プランの見直し ○豊後大野市学力向上推進部会にて、市内における各種調査の分析・改善策の協議 (参加者：豊後大野市教育委員会指導主事、指導教諭、学力向上支援教員、習熟度別指導推進教員、小学校教科担任制推進教員 等)
8月	○市内全小・中学校において学力向上会議実施 ○豊後大野市学力向上推進部会にて、市内における各種調査の分析・改善策の協議 (参加者：豊後大野市教育委員会指導主事、教務主任、研究主任、指導教諭、学力向上支援教員、習熟度別指導推進教員、小学校教科担任制推進教員 等)
9月	○校内研究充実のための指導主事の指導訪問
10月	○『3つの提言』推進重点校（三重中）における「新大分スタンダード」を踏まえた公開授業による研究発表の実施

1 1月	○校内研究充実のための指導主事の指導訪問
1 2月	○市内全小・中学校において学力向上プランの見直し
1月	○豊後大野市学力調査 ○豊後大野市学校教育シンポジウム
2月	○市内全小・中学校において学力向上会議実施 ○「中学校学力向上対策3つの提言」推進重点校（三重中）豊後大野市教務主任会議での研究報告
3月	○豊後大野市学力向上推進部会にて、豊後大野市学力定着状況調査の分析・改善策の協議（参加者：豊後大野市教育委員会指導主事、教務主任、研究主任、指導教諭、学力向上支援教員、習熟度別指導推進教員、小学校教科担任制推進教員 等）
年間	○学力向上支援教員2名、習熟度別指導推進教員1名による公開授業実施（1人3回） ○豊後大野市学力向上推進部会（豊後大野市教育委員会指導主事、学力向上支援教員、習熟度別指導推進教員、小学校教科担任制推進教員）（毎月1回） ○豊後大野市中学校学力向上教科部会の実施（年間2回）

3. 実践研究の成果の把握・検証

【令和元年度 全国学力・学習状況調査（平成31年4月18日実施）】（正答率）

教科	小6・国語	小6・算数	中3・国語	中3・数学	中3・理科
市	68	68	72	53	52
大分県	67	67	74	61	55
全国	64.0	66.7	73.2	60.3	56.5

【令和元年度 大分県学力定着状況調査（平成31年4月23日実施）】（偏差値）

教科	小5・国語		小5・算数		小5・理科	
区分	知識	活用	知識	活用	知識	活用
市	52.4	51.0	53.2	51.8	51.0	51.5
大分県	52.1	51.6	52.2	52.1	52.2	51.3

教科	中2・国語		中2・社会		中2・数学		中2・理科		中2・英語	
区分	知識	活用	知識	活用	知識	活用	知識	活用	知識	活用
市	53.7	50.5	50.7	51.0	49.8	49.8	50.4	50.6	49.4	49.4
大分県	51.8	50.5	50.5	50.3	50.7	50.6	50.9	50.5	50.3	50.3

【令和元年度 豊後大野市（標準）学力調査（令和2年1月15日実施）】（正答率）

教科	中1・国語		中1・社会		中1・数学		中1・理科		中1・英語	
区分	基礎	活用	基礎	活用	基礎	活用	基礎	活用	基礎	活用
市	72.2	57.0	55.7	37.2	65.1	38.2	55.7	54.4	61.5	38.5
全国	70.3	56.4	56.1	39.6	65.5	43.0	52.7	45.6	62.3	41.7

【達成指標】

「令和元年度全国学力・学習状況調査」において

・小学校・中学校ともにすべての教科の「A知識」「B活用」が全国平均正答率を超える。

⇒《小学校》○全国学力・学習状況調査においては、3年連続（H29～R元）して、
国語A・B、算数A・Bで目標値である全国平均正答率を上回った。

《中学校》○すべての区分において、全国平均・県平均を下回り、目標達成ならず。

○数学においては、全国平均との差が大きい。（-7.3）

「大分県学力定着状況調査」において

・小学校・中学校ともにすべての教科の「知識」「活用」が偏差値50を越える。

⇒《小学校》○5年連続（H27～R元）して、全ての教科において目標偏差値50を上回っており、安定しつつある。

《中学校》○国語、社会、理科で目標偏差値50を上回った。

○数学、英語についても県平均との差は小さかった。

「豊後大野市学力調査（1月）」において

・すべての教科の「知識」「活用」が全国平均正答率を超える。

⇒《中学校》○国語・理科の「知識」「活用」が全国平均正答率を超えた。

○社会・数学・英語においても全国平均と僅差であった。

【取組指標】


・全教員が実際の全国調査を解き、

指導の改善策を考える研修を年2回以上実施した学校 100%

⇒ 100% 校長会議で提案し、実施報告書を提出するよう指導した。

・活用型問題を取り入れた授業を年2回以上実施した教員 100%

⇒ 100% 市独自の「確かな学力」定着に向けた『目標達成に向けた重点的取組～第2ステージ～』に位置づけ、検証・改善を行い取り組みを推進した。



目標達成に向けた重点的取組 ～第2ステージ～

「主体的な自己実現」をめざして ～15に春を～ 豊後大野市教育委員会

『第2ステージ』… 2018年10月～2021年度末までの3ヶ年【PDCAサイクル】

達成指標	(1)全国学力・学習状況調査において正答率を全科目全国平均以上 小学校は全国平均かつ県平均以上 (2)小学校:年度末CRT調査において評定1の割合を 低学年5%以内、中学年10%以内、高学年15%以内 中学校:年度末標準学力調査において正答率30%以下を15%以内(1年)
-------------	--

1 学びに向かう集団づくり

(1)主体的な学びにつながる自治的・自発的な特別活動（学級活動等）や行事の充実
(2)被差別の子どもを中心とした仲間づくり、人権学習の確かな実践

1 学びに向かう集団づくり

- (1)主体的な学びにつながる自治的・自発的な特別活動(学級活動等)や行事の充実
- (2)被差別の子どもを中心とした仲間づくり、人権学習の確かな実践

2 学習規律・学習環境

- (1)チャイムで始まりチャイムで終わる(徹底)
- (2)学習環境のUD化

3 基礎・基本

- (1)「めあて」・「課題」・「まとめ」・「振り返り」の位置づいた1時間完結型授業の日常化
- (2)構造的な板書とノート指導(特に小学校)の工夫
- (3)授業におけるスキルアップタイムの充実
- (4)授業前、授業中における補充指導の工夫
- (5)辞書の活用の習慣化と計画的な図書館活用

4 思考力・判断力・表現力の育成

- (1)UDのよさを取り入れた授業展開～「聞いて理解する授業」から「考えて理解する授業」へ～
- (2)過去問題から「解き方」を学び、活用問題へ取り組む
- (3)探求型の総合的な学習の時間(郷土学)、体験活動の充実
- (4)読み取る力

5 中学校教科指導力の向上

- (1)数振教科部会の充実や近隣校との合同教科部会による研究推進

6 保護者との連携～家庭教育力UP5カ条の周知・徹底

- (1)生活スケジュール表・学習の手引を活用し、宿題定着率100%
- (2)各学年の学習状況調査結果の保護者への公表

キャリア教育を意図した日常実践で「主体的な自己実現」力をつけていく!

4. 今後の課題

「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力等の育成のためには、「主体的な学び」を促す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」を設定した問題解決的な授業を、全ての教員が実践する必要がある。各学校に周知するとともに、指導主事による訪問等で実際の授業について指導助言していく。

また、「協力校」である三重中学校においては、「めあて」(課題)と「振り返り」(まとめ)の整合性を高めること、ペア・グループ学習を毎時間実施することにより、授業の質を高めることなどをめざしていく必要がある。

さらに、昨年度の課題として生徒の学習目標が規律に特化していて、学びにつながるレベルに至っていないことがあげられたが、ずいぶん改善されてきた。今後も意識しながら取組を進めていかなければならない。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	大分県	番号	44
-------	-----	----	----

協力校名	大分県豊後大野市立三重中学校
------	----------------

1. 当初の課題

学力調査の結果分析から明らかになったこととして

- 全体的に数学・英語を苦手とする生徒が多い。
- 全教科とも大分県学力定着状況調査や全国学力・学習状況調査の結果において、県や国の分布に比べ、上位層が少なく下位層が多い。
- 全体的に家庭学習時間が少ない。メディア端末利用時間が長い。
- 計画的な学習ができていない。
- 基本的「生活・学習習慣」が定着していない割合が多い。
- 授業の中で自分の考えや思いを発言しようとしにくい。発言するのが苦手。などが挙げられる。
- 学級によっては、「支えあう」「認め合う」「励ましあう」ことのできる好ましい学級集団になりえていない。

生徒アンケート結果の「授業がわかる」の肯定的回答率は70%前後であり、設定した指標には到達しているとは言えず、「低学力層（定期テスト等で40点未満）の人数を20%以下」という指標についても達成できていない。下位層を中心とした個人指導の充実やUDの視点に立った環境・授業づくりに努め、「学びに向かう集団・生徒づくり」をさらに進めていく必要がある。また、「家庭学習時間増」と「集中した家庭学習の取組」のために、家庭学習計画表の利用やメディア端末利用時間の呼びかけなど、家庭と連携した取組も必要である。

2. 協力校としての取組状況

【組織】

前年度の課題を改善するために、研究組織の再編を行い、全職員が2つの重点目標の達成に関わり研究を進めていけるように、Sプロジェクト（教科部会）とLプロジェクト（専門部会担当者会）の両方に所属する組織をつくった。Sプロでは主に授業改善を、Lプロでは生徒会活動の活性化を中心に進めていった。



【具体的取組】

組織的な授業改善による「新大分スタンダード」の徹底

■授業改善の取組

定期的にSプロ会議を行い、次のような実践を行った。

○すべての生徒にわかりやすいように、新大分スタンダードの視点に沿った、1時間完結型の授業を徹底し、日常化する。

○生徒が協働して活動ができるようなペアやグループによる活動を毎時間または単元を通して取り入れる。

その中でも重点取組として

- 基礎基本の定着…復習や反復練習の工夫
- 生徒が自ら課題解決に向かう「課題」設定の工夫…より深い学びにつなげるための「課題」の工夫
- ペア・グループ活動の工夫…生徒がより主体的により協働して活動できるようなペア・グループ活動の工夫、話し合いの場の工夫（説明し伝え合う活動）

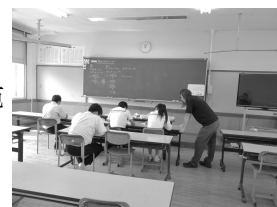
■習熟度別指導の取組

習熟度別指導においては、数学科を中心にその年の状況に応じて実施した。

○今年度は2年生全クラス（4クラス）、3年生全クラス（5クラス）で実施

○希望制による「標準クラス」（20名程度）と

「基礎クラス」（5～10名程度）の編成。



■互見授業・授業研究の取組

毎学期に1回以上互見授業を行うこととして、教科の壁を越えた授業改善を進めている。

○教科内また担当教科以外の互見授業の実施

○道徳や学活の提案授業を行い、全員で研修（参観、研究討議、指導主事からの指導・助言）

○公開授業研究会での授業公開（国・社・数・理・英）



道徳提案授業



事後研の様子



公開授業研究会

学校規模に応じた教科指導力向上の仕組みの構築

■「授業のタテ持ち」の取組

その年度の教科の人数によって「タテ持ち」を実施している。

○今年度は社会科以外の教科で実施

ちょっとした時間を利用しての授業についての打ち合わせ→



（今年度のタテ持ちの例）〔数学〕

	1組	2組	3組	4組	5組
1年	A	A	C	A	B
2年	BC	BC	BC	BC	
3年	AE	DE	DE	DE	DE

■「教科部会」の取組

今年度は教科部会をSプロと位置づけ、校内研修と連動して定期的に行っている。

○教科部会を日課表に位置付ける

○S（学習）プロジェクト会議を定期的に行い、「深い学びを旨とした授業の創造」を目指す



「生徒と共に創る授業」の推進

■生徒による授業評価の取組

授業改善に反映するため、生徒による授業評価を毎学期行っている。

○毎学期中頃に「中間アンケート」を実施

○毎学期末に「学習に関するアンケート」、教科ごとに「授業アンケート」を実施

○授業アンケートに「授業への要望や感想」について記述欄を設け、生徒の声を授業改善に活かす

○アンケートの結果を、毎学期Sプロで分析・改善策について話し合い、授業改善につなげる

■学習目標の取組

学習目標・生活目標を各クラスで設定し、生徒によるPDCAサイクルによる振り返りを行った。

○全クラスで学級目標を具現化するための「学習目標」「生活目標」を設定し、振り返り・改善策を行う。

■学びに向かう学習集団づくりの取組

今年度は生徒会専門部担当教員部会をLプロとし、意見を出し合いながら、専門部活動の活性化をすすめた。

○Lプロ会議（専門部担当者会）を定期的に行い、「社会的自立を旨とした「学びに向かう集団づくり」を目指す

○「Lプロ→専門部長への助言→専門部活動→効果」の例（学習部）



<専門部活動の一工夫ポイント>

- ★学習部に自覚を持たせて、クラスへの呼びかけを促した。
- ★職員室前に結果を掲示し、生徒に自分のクラスの結果を意識させた。
- ★期間が終わった後、学習委員会で結果がよかったクラスがどんな工夫をしたか聞き、おすすめの工夫として紹介した。
- ★結果がよくなかった学年の学年専門部会で改善策の話し合いをした。

<効果>

- ★学習部員が毎日呼びかけ。クラスマッチが始める前も数回。
- ★学習部以外の生徒にも、活動の結果を確認させ、意識させることができた。
- ★起立・例の号令のときに「大きな声であいさつをして下さい」と毎回伝えたという工夫を聞いて、自分のクラスでも取り入れるクラスがあった。
- ★「ポスターをつくる」「もう一度学年だけでチェックを行う」など学年独自の活動につながった。

○学年生徒会を行い、学年で学びに向かう雰囲気づくりを行った。

（1年生の例）学年生徒会で学年の実態・課題を確認→学年で「3・2・1号令」「私語」「清掃」の3点を10日間チェック→毎日放課後、委員長会、学習部会、環境部会で振り返りと改善策を検討→クラスへの声かけ→（効果）学年全体の意識の高まり

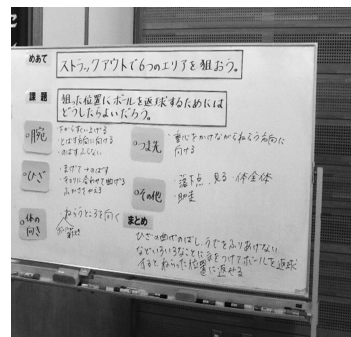
3. 取組の成果の把握・検証

【授業改善】

○教科部会の時間確保が難しいという前年度の課題をもとに、今年度は教科部会をSプロジェクト会議として位置づけた。そして、校内研修の中でSプロの時間を確保したり、教科ごとに時間設定を行ったりなどして、教科部会の回数を増やすことができた。

○Sプロにて定期的に授業の工夫・課題・改善点について話し合いを行うことで、その都度課題を分析し、改善策を考えることで次の実践につなげることができた。

○理解しやすさをさらに高めるために「板書の構造化」について職員で再確認し、全教科で同じ板書形式をめざした。（「めあて・課題」は青囲みまたは青ライン、「課題・まとめ」は赤囲みまたは赤ライン、授業の流れのホワイトボードを各教室に配置など）



○生徒アンケート結果からも、学習に対する意識が少しずつ高まっていることがわかる。

<生徒アンケートより> 5段階評価

質問項目	7月 (4・5評価)	12月 (4・5評価)
授業は楽しい	53.9%	63.5%
友達と一緒に解くと楽しい	70.1%	78.0%
「めあて・課題」を理解して授業に臨んでいる	64.2%	75.9%
ノートに「まとめ・振り返り」を書く	77.9%	87.8%
授業の流れがわかる	70.3%	78.8%
ペア・グループで考えを出し合う時間がよくある	66.4%	80.1%
ペア・グループ学習で考えが深まる広がる	59.8%	79.3%

【習熟度別指導】

○習熟度別指導については、生徒が意欲的に取り組めるように学習内容（章）ごとに移動を可能にしたり、内容によって一斉授業で行ったりなど柔軟な対応を行った。

○基礎クラスでは、教室に既習事項を掲示するなど振り返りをしやすい環境づくりにも力を入れた。そして、練習問題や復習の時間に重点を置くなど、基礎の理解・定着を大切にした。そのため、数学に苦手意識を持っている生徒も意欲的に参加する姿が見られた。



掲示物の工夫(フラッシュカード、授業で必要な既習事項等)

【互見授業・授業研究】

○「3つの提言」に係る提案授業や公開授業研究会など、教科内で内容を審議し授業研究をする機会は複数回あり、教科の指導力向上につながっている。

○「道徳」「学活」について、全員での研究授業と指導主事による指導・助言、「総合的な学習」

については指導主事による指導・助言等の時間を設け、授業改善につなげた。

- 自分の教科以外の互見授業においては、「3つの提言」に係る提案授業を利用し、自分が参加できる時間を選び実施した。また、その放課後、参加者数人によるミニ授業研を行った。

【授業のタテ持ち】

- 「タテ持ち」をすることで、授業プリントを検討したり、指導の流れや進捗の確認などをするために、同じ学年を担当する教員で集まり相談したり情報交換する機会が増えた。

【教科部会】

- 校内研修の中でSプロの時間を確保したり、教科で打ち合わせて時間を決めたりなど、教科部会の回数を増やすことができた。また、Sプロ会議の内容を報告書として毎月まとめPDCAサイクルで振り返りをおこなった。その月の実践を振り返ることで、その時点の課題や改善点を明らかにし、次の月の実践につなげることができた。
- 学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員を中心に授業改善の工夫を公開授業として提案授業を行い、市教科部会や小学校の推進教員等と交流し研究を深めた。

【生徒による授業評価】

- アンケートの集約結果についてSプロで分析を行い、「生徒評価で課題となる項目や評価を高めた方がよい項目」「現状または原因」「今後の取り組み（改善策）」について話し合った。PDCAサイクルで改善・実行・振り返りを繰り返しながら、教科指導力の向上や授業改善につなげている。また結果の分析により、授業者それぞれの自分の課題の把握や改善につなげていくことができた。

(授業アンケートのふりかえりの例) 【理科】

課題・評価を高めた方がよい項目	現状または原因	今後の取り組み（改善策）
ペア・グループ活動で考えを出し合ったり深めあったりする場がある。	主に実験を利用してグループ活動を行った。	・実験以外の場面でペア・グループ活動を増やす。 ・班員の構成を工夫する。
「まとめ」や「振り返り」が分かりやすい。	生徒による「まとめ」が少ない。「振り返り」があまり行われていない。	・生徒による「まとめ」に取り組む。「振り返り」を ①生活に結びつけるもの、②重要語句の振り返り、③次時につながるものなど教材に合わせて行う。

- 生徒が自由に記述する欄を設けることで、生徒の要望がわかり授業改善に生かすことができた。

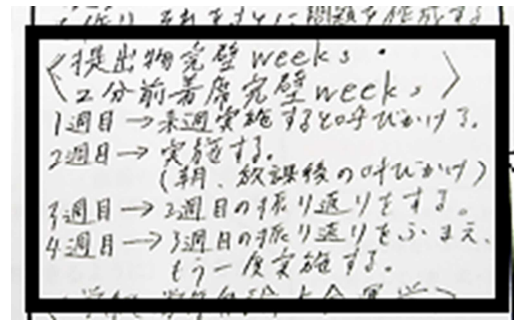
(授業への要望や感想：生徒の記述より) ・班で交流する時間を増やしてほしい ・タブレットをもっと使いたい ・もっと難しい問題をしたい ・練習問題を多くしてほしい ・図で説明してくれてわかりやすい など

【学習目標設定】

- 学習目標について、昨年度は学習規律についての目標が多かったが、今年度は「互いに支え合いながら目標に向かってそれぞれが努力する」「本気で考えメリハリのある授業をつくる」など、学習に対する意識を変えていこうとする目標が見え始めた。
- 後期は、学習部の活動計画に「学習目標のふりかえり」という活動が組み込まれ、専門部活動としても振り返りをして改善していこうとする取り組みを行うことができた。

【学びに向かう学習集団】

○今年度は、全校で学習に向かう雰囲気をつくるためにLプロで全専門部で同じ目標を持ち、生徒会活動の活性化を進めた。特に意識を高めるための「見える化」効果を高めるための「一工夫ポイント」を意識し、重点的に取り組ませた。その結果、今までの活動をレベルアップしたり、新しい活動を取り入れたり、専門部活動の活性化につながった。



PDCA サイクルで、活動の中に「実施」「振り返り」「改善」をセットにした活動を計画した。生徒たち自らが振り返りをして次につなげようとする姿勢が見られるようになった。

【学力調査の結果】

<1年標準学力調査正答率> (2020年1月15日実施)

	国語	社会	数学	理科	英語
本校	68.6	48.9	59.7	52.7	54.3
市	68.8	52.0	59.6	55.2	54.9
全国	67.2	52.8	60.9	50.4	56.4
全国比	+1.4	-3.9	-1.2	+2.3	-2.1

○5教科とも全国平均に近い平均点であり、ある程度の力はあるといえる。特に基礎的な力については、全国平均に近い正答率であった。

○例年の弱点である活用の力についても、国語と理科では全国平均を超えた。

4. 今後の課題

【授業改善】

△より深い学びにつながるための「課題」設定については、まだ十分とは言えない。生徒が意見を出し合いながら、思考力をより高めていけるような課題をさらに検討していく必要がある。△ペア・グループ活動では、人間関係も影響する。編成方法や話し合いのしかたなどの工夫や、学級づくりなど特別活動と連動した取り組みをしていかなければならない。

【互見授業・授業研究の取組】

△他教科の提案授業に都合が合わず、互見授業ができていない教員もいる。全員が参加できるような工夫が必要である。

【タテ持ち】

△学年ごとの行事や出張などにより日課表の変更が必要になることが多いが、日課表の変更が複雑になり、進度にばらつきが出るがあった。

△打ち合わせや他学年の生徒の情報共有の時間確保が必要であるが、十分とれないがあった。

【学習目標設定】

△学習・生活目標と学級目標は連動しているので、学習部だけではなく、もっと学級づくりと連携した取り組みができると効果的である。

【学びに向かう学習集団】

△生徒がもっと自主性を持ち活動できるような支援や声かけが必要である。

△本部役員の意識づけやどんな集団をめざしていくのか等の共通認識が重要である。

△生徒との打ち合わせの時間やしっかりと専門部活動に取り組むための時間の確保が課題である。

【学力調査の結果】

△生徒間の学力差が大きく、低学力層が多い。各教科において、「基礎の定着」のための取り組みを継続していかなければならない。

△社会・数学・英語においては、活用の分野でやや低い正答率となっており、基礎的な知識を活用して考える問題を苦手とする生徒が多いと考えられる。今まで以上に話し合い活動や活用問題を解く機会を増やしたり、既習内容の振り返りを行ったりして、内容定着を図っていく必要がある。